【いま第一線】

子育ての先に射してきた光
～仏像制作に巡り合えて

瀧澤浩子（高31回）

私は、学生の頃から将来はキャリアウーマンとして社会で活躍するような生き方をしたいと夢見ておりました。そして今でいうＩＴ企業に就職しました。専門的な勉強や社外研修などが終わり、いよいよ実践となる時期に入った頃、慌ただしく人生の方向が変わりました。仕事上で９才年上の主人と出会い、半年後に結婚、妊娠、退社、出産。12年間で５人の子どもを産み、育て、今日まで家族を支えることに奮闘する日々を送ってまいりました。キャリアウーマンとは全く異なる人生になったわけです。

男の子を望まれて

主人の実家は新潟県の豪雪地方で１００年以上続く造り酒家を営んでおりました。主人は姉一人の長男でしたので、結婚当初から、後々は戻って家業を継ぐことが期待され、嫁である私はまず「元気な男の子」を産むことが望まれました。ところが生まれるのは女の子ばかり。主人の父には落胆され通しでした。ようやく４番目で男の子が生まれ、その下にもう１人女の子が生まれ、私は１男４女の母となりました。

５人の出産もスムーズだったわけではありません。長女は心音が下がってしまい、緊急帝王切開で産みました。その後のお産も子宮破裂の可能性から状況を見ながらの出産でしたが幸い安産で、４番目までは自然分娩できました。ただ５番目の時は、出産を繰り返したことで子宮の膜が薄くなってきている可能性が高いと言われ、また帝王切開になりました。

それでも５人も産んだ原動力は何だったのか……。思い返してみますと、主人の両親に認められたいという思いもありましたが、妊娠出産を繰り返して落ち着かない状況を続けることで、後継問題を先延ばししていきたいという、私なりの抵抗だったようにも思います。毎年夏と冬は新潟に帰省し、主人の母の手伝いをしておりましたので、造り酒家の嫁の苦労は想像がつきました。また主人の両親は揃って気性が激しく、気難しく、考え方も古く、穏やかな会社員の家庭で育った私には持ちこたえられないだろうとも感じていました。

もちろん、子どもが１人増えるごとに、また新しい生命に会え、皆それぞれ違った個性があり、自分の生き甲斐が広がっていくような喜びの実感があったことも大きな原動力になっていたと思います。

ワンオペ育児で奮闘の日々

長女は生まれた時１９００グラムしかなく、その後も病院通いが続き、育てるのに大変苦労しました。体も周囲の子達に比べかなり小さく、さまざまな面で遅れていたため、中学を卒業するころまで仲間外れやいじめにあい続けました。初めての子でしたので学校の敷居も高く、先生に相談に行くこともためらいました。思い切って相談しても、事案は結局水面下に潜るだけで、さらに悪化することも度々ありました。親子で何年もカウンセリングに通いました。

下の子たちも当然、母親に対する独占欲は強く、外でのストレスをぶつけ合うので、喧嘩が絶えません。親は遠方にいて助けてもらえず、また主人はあまり家庭的ではない人でしたので頼ることを諦め、私は１人で子育てを背負いました。今でいうところのワンオペ育児です。

５人の子どもはそれぞれ個性的で、得意なことも性格も全く異なります。勉強もできる子とできない子と両極端でした。私はその子に合った言葉かけをしようといつも頭を悩ませていました。私自身も未熟で、方針も一貫性がなく、暗中模索の毎日でした。

次女は大学受験で精神的に不安定になり、三女は部活と反抗期が重なって荒れた時期があり、長男はクラスのリーダー的存在だったのが裏目に出ていじめを受けたことがありました。末娘もやはりいじめが原因で、ますます引っ込み思案になり、高校まで仲良しの友だちもできませんでした。

５人の子ども達（左から２歳、４歳、７歳、11歳、14歳の時）

●たきざわ・ひろこ
飯田市鼎出身。立教大学法学部卒。練馬区青少年育成地区委員、石神井地区祭実行委員、石神井中学校学校評議員。これまでの恩返しと思い、地域の子どもたちのための活動を始めた。これまで行けなかった旅行も計画中。

「母親は家の中の太陽でなくてはならない」

私は小学生の頃からずっと鍵っ子でしたので、子ども達が心に苦しみや疲れを抱えて帰ってきた時こそ、家に居てゆったり受け止めてあげたいと思いました。そのために、掃除、洗濯など家の中をできるだけ清潔にしておくこと、バランスの良い食事をしっかり食べさせることが必要です。それをこなしながら働きに出ることは自分には無理だと思いました。日々切り詰める生活で、家族旅行や遊園地などにもほとんど行かず、我慢させたことも多かったのですが、毎日の生活環境は大切にしました。

小さい頃から疲れやすく体を動かすことが嫌いで、いつも家でゴロゴロしていた私は、母から「そんなことじゃ、将来子どもを産んで育てるなんてできんに！」とよく言われたものでした。そんな私が5人の子どもを産み育てることとなったのです。母として、子どもが周囲からいじめられるという苦しい思いを何年も経験しました。主人の実家の問題や主人の転職など、他にもいろいろなことがあり、精神面も体力面もずいぶん鍛えられたように思います。何とか乗り越えてやってこられたのは子どもの数だけ感動や楽しみをもらったからです。子どものがんばりを見て、人との繋がりも広がり、感謝し、自分自身が子どもと一緒に成長させてもらいながらできたことだと思っております。

そして、私がずっと専業主婦でいられたのは、遠方からいつも心配してくれていた実家からの度々の援助など、恵まれた環境があったことも否めません。実家の母からはいつも「母親は家の中の太陽でなくてはならない」と言われておりました。実際、母は、いつを思い出しても明るく元気で太陽のような存在でした。それは認知症が始まった今でも変わりません。

手のかかった末娘が、昨年、全校弁論大会でいじめられた苦しい体験を語り、いじめ撲滅を訴えて銀賞をいただきました。5人の子がそれぞれ、自分で道を切り開いて歩きだしてくれたのを見て、母としてようやく安堵しているこの頃です。

弁論大会で銀賞を受賞した四女（前列左端）

修学旅行で仏像に心惹かれて

10年ほど前、たまたまカルチャースクールの折り込みチラシで「仏像彫刻」を見つけました。中学の修学旅行で仏像に強く心を惹かれて以来、なかなか見にも行けませんでしたが、惹かれる思いはずっと続いていました。しかし、もともと手が非常に不器用で立体をイメージする力もセンスも乏しかったので、無理だろうと思いながら見学に行ってみたのです。

仏像彫刻の先生は、「器用にカッコよく彫る必要はなく、瀧澤さんらしい仏像が彫れればよいんだよ。少しずつ少しずつ彫り進めていけば大丈夫！」とおっしゃいました。

蓮華観音像

しかし、やはり周りの生徒さん達に比べて極端に学びが遅く、1体目の白衣観音は半年、2体目の蓮華観音は5～6年かかりました。そして3体目の月光菩薩の荒彫りの最中に、先生が突然心不全で亡くなってしまったのです。ショックが大きく、彫りかけのまま放置していたのですが、その2年後、亡き先生から引き寄せられたようなご縁があり、再開しました。月光菩薩もそろそろ仕上げの段階です。次は日光菩薩を彫ろうと思っております。

これからの人生、ゆっくりゆっくり

昨年、『稲穂』14号で、長年すばらしい仏像を数々彫られていらっしゃる清水弘志さん（中47回）のインタビュー記事を拝見しました。その中で「すべての人の心の内には仏さまがいらっしゃる……」という文があります。私も先生から同じようなことを教わりました。仏像を彫ると自分の中の仏性が表れ、仏像の顔は自分の顔に似てくるとも。不思議なことに、私の仏像の顔は、私に似ているとよく言われます。

また清水さんが、仏像を彫っている心の状態を「無心」という言葉で表現されています。私などまだまだ語れるようなレベルではないのですが、たしかに、思うように彫り進められる時は、何か時間を忘れるような心の状態になっている感じがします。そうなれない時は不器用な私のままでなかなか彫り進めることができません。

当初、仏像の仕上げはサンドペーパーでツルツルに磨くのだと思っておりましたら、彫刻刀で気長に少しずつ粉を出すくらいに薄く削って綺麗に仕上げていくと知って、びっくりしました。先生は「それは自分の心の垢をとる作業だよ」とおっしゃいました。元々大変せっかちな性格の私には心の鍛練になる思いです。彫刻刀も未だに上手く研げず、限りなく先の長い修行のようですが、それもなんだか楽しみになってきました。長い人生、ゆっくりゆっくりやっていこうと思っております。